キス・ミー・ケイト（1953）

KISS ME KATE

メディア 映画
ジャンル ミュージカル
製作国 アメリカ
色彩 Color
時間 110分
初公開日 1987/01/17
公開情報 ヘラルド・エンタープライズ

【解説】

鳴り物入りで製作以来、ウン１０年での本邦初公開となったＭＧＭミュージカルだが、グレイソン、キール主演コンビの歌唱はどうにも鈍重で、これがコール・ポーター・ナンバーかという歌いっぷりなので観ていてあまり乗れない。劇中劇とバック・ステージのドラマが同時進行するという、ふるったトニー賞受賞の舞台の映画化なのだが、それには演出の洗練が当然要求され、Ｇ・シドニーにそれを期待するのも筋違いだろう（決して彼を貶めて言うのではない。彼の作品の大半はその分に合った面白さがある）。ミュージカル役者フレッド（キール）の率いる劇団の新作は“キス・ミー・ケイト”。シェークスピアの『じゃじゃ馬ならし』の翻案で、主演のフレッドの相手役は彼の別れた妻リリー（グレイソン）だ。役柄通りの気性の激しさで本番中に私情を持ち込み暴れるリリーに、慌てふためくフレッドだが…。そこに準主役のダンサー、ルイス（Ａ・ミラー）の恋人ビルがフレッド名義で作った借金を取り立てにきたギャング二人組がからんで、スラップスティックな興趣が盛り込まれる。ミラーのがさつな存在感は素晴らしく、冒頭のレッスン場面でグレイソンに対抗して踊る“It’s Too Done Hot”は大変な迫力。しかし、全体にどことなく安っぽいのは、Ｊ・カミングスのプロデュース作特有のムードのせいもあるが、純然たるテクニカラーでないアリスコカラーの発色の悪さも関連していよう。ただ、ハーミーズ・パンの振り付けは若々しく躍動的。Ｂ・フォッシーが準主役で出演しているが、彼などの次世代につながっていく仕事である。

【クレジット】

監督	ジョージ・シドニー	George Sidney
製作	ジャック・カミングス	Jack Cummings
脚本	ドロシー・キングスレイ	Dorothy Kingsley
撮影	チャールズ・ロッシャー	Charles Rosher
音楽監督	ソウル・チャップリン	Saul Chaplin
	アンドレ・プレヴィン	Andre Previn
作詞	コール・ポーター	Cole Porter
作曲	コール・ポーター	Cole Porter
出演	キャスリン・グレイソン	Kathryn Grayson
	ハワード・キール	Howard Keel
	アン・ミラー	Ann Miller
	トミー・ロール	Tommy Rall
	キーナン・ウィン	Keenan Wynn
	ジェームズ・ホイットモア	James Whitmore
	ボビー・ヴァン	Bobby Van
	ボブ・フォッシー	Bob Fosse

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2024 Stingray. All Rights Reserved.